

アメリカでの経験を心得て想うこと  
口羽 文 (国立がん研究センター)

幸運にも、約 3 年間ボストンで仕事をする機会をいただきました。英会話のできなさには愕然としたものの、適応力は比較的高かったのか、適度な緊張感とリラックスの混ざった充実した時間を過ごすことができました。また、この期間は、価値観が大きく異なる人々の中で一から人間関係を作るという貴重な経験もしました。そして、結局どこに行っても私の根本は変わらない気がして、開き直りのようなすがすがしさも得てきました。

ボストンでは、いわゆるポスドクとしてダナ・ファーバーがん研究所に所属し、分子疫学分野の研究に携わっていました。2 ヶ月に一度、主に生物統計学、疫学、病理学の専門家が集まり、お互いの問題点を共有する、あるいは新しい課題を見つける、そして、誰が解決するか(あるいはペンディングにするか)を決めることを目的としたワーキンググループに参加していました。ここで私は、Nurses' Health Study や Health Professionals Follow-Up Study などのコホート研究の統計的側面に責任を持つハーバードの統計家チームと仕事をする機会を得たのですが、ワーキンググループであがった統計的な課題はもちろんこのチームで取り組むこととなります。こちらのメンバーとは 2 つの定期ミーティング(週に 1 回と 2 週に 1 回のもの)を持ちながらプロジェクトを進め、次のワーキンググループで進捗を報告する、という感じで仕事をしていました。さらに、統計家チームでのランチ勉強会(ピザつき)があり、統計の理論と実際に疫学研究で生じる問題への適応とのギャップを埋めたり、コンセンサスを得たりしていました。

ポスドクとは研究者の見習いのようなものですが、議論の場ではどのような立場の研究者であっても一研究者としてみんながフラットな関係となり、まず「考える」ことが求められます。専門性が確立しており役割がはっきりしている中での共同研究の仕方は、日本で漠然とした不安を感じていた私にはとてもよい刺激になりました。また、どんなことでもやり始めたらとにかく形にする使命感のようなものがあり、一つの課題あるいは分野を深く追求することで次の可能性が開けていく環境でもありました。各個人の自己管理能力の高さや自立心の強さにも学ぶところは多かったですが、それに加え、共同研究を進めていく上で、自分の成果とチームの成果の相乗効果を探すような場の動かし方にはさすがと思うしかありませんでした。

研究プロジェクト以外では、測定誤差クラスの teaching assistant (TA) をさせていただきました。TA の仕事として、ハーバードの学生さんたちに宿題や試験問題を作ったり、それらを採点してスコアをつけたりと面白い経験をしました。この時期、学生さんの誰よりも私が勉強させてもらったと思います。そして、ハーバードの学生さんでも宿題をするのは期限の直前なんだなあとなんだかほっとしたりしました。

時間軸は前後しますが、私は博士課程の学生の中に JCOG (日本臨床腫瘍研究グループ) でお世話になり、その後国立がん研究センター研究所、ダナ・ファーバーがん研究所を経て、今は再び国立がん研究センターで仕事をしています。帰国後は、研究環境も分野も変わり、なぜか渡米したときよりも戸惑うことが多いのですが、周りの先生方にいつも支えていただきながらなんとかやっています。確かに、マンパワーや成果を出すための効率的なシステムについていえば、大きな差を感じることもありますが、今の自分がここでできることは何だろうと考えながら日々を過ごしています。

私がアメリカでの経験から得たことは、言葉にすればごく当たり前のことばかりかもしれませんが、Dr. Wacholder

(突然の訃報に本当に残念な気持ちでいっぱいです)にお会いしたときに、「統計家と仕事をするのを大事にしてください。自分のようなシニアの統計家になっても統計家の仲間がいなければいい仕事はできない。そして、世の中へインパクトを与える仕事をしなさい」という言葉をいただいたことをよく思い出します。今は、問題・課題を見極め積極的に向き合うこと、(国内・外問わず)仲間を見つけること、そして、結果を出していくことを大切に思っています。自分が生き生きと仕事や研究に取り組むことが、この分野の活性化や発展に少しでもつながることを願っています。

最後になりましたが、このシリーズに寄稿する機会をいただきましたことに心から感謝申し上げます。